

開催地名	徳島県北島町
開催日時	令和 5 年 9 月 26 日（火） 13 : 30 ～ 14 : 30
開催場所	北島町立図書館・創世ホール（3F 多目的ホール）
語り部	糸日谷 美奈子（千葉県千葉市）
参加者	中学生 230 名
開催経緯	南海トラフ巨大地震による被害が想定されているが、当町では大規模な災害の被災経験がないため、災害への危機感が薄れている懸念がある。今回は若い世代への災害伝承として実際に大規模災害を経験された方の話を聞くことで、自然災害が身近なものであると捉え、防災意識の向上を図ることとする。
内容	【助けられる人から 助ける人へ】 （１） 釜石東中学校が経験した 地震と津波 釜石市は沿岸南部に位置する町だ。町の中にある釜石東中学校は築 37 年の古い校舎で、全校生徒数は 220 名の学校だ。3 月 11 日 14:46。ほとんどのクラスは帰りの会を終えて部活動の準備をしていた。職員室では教員の携帯電話から地震速報が一斉に鳴り始め慌てて外に避難すると、震度 6 弱の地震が発生した。 ワゴン車は飛び跳ねるように揺れ、平らな道路は蒺藜のようにしなり始めた。誰一人立っていることはできない状態だった。ある程度揺れが収まると、校庭にいたサッカー部が一斉に校外に走り始めた。一部生徒はフェンスをよじ登り校外に出ようとしている。先生からは「そのままいけと」と指示が出る。体育館、校舎からも次々と生徒が出てくる。これらはすべて生徒自身の判断だ。地震後校内では停電がすぐ起こり、校内放送が使えない状態になった。その為バラバラの避難になってしまった。 1 名松葉杖の生徒を発見し、数名の教員と肩を貸し合い避難をした。周りを見渡すと誰もいなく、逃げ遅れたと感じた。やっとの思いで第一避難場所に行くと、クラスごとに整列が完了していた。 一部の生徒から「先生怖いです。もっと高いところに逃げたいです。」と声が上がった。教員にて直ちに判断を行い、第二避難場所(第一よりも高台)に移動することが決まった。小学生も避難していたため、小、中学生でペアを組み、手をつなぎ避難を始めた。第二避難所には保護者も多くおり合流できた生徒もいた。ここまで、地震発生から 30 分経過。 第二避難所は、建物と木々に囲まれた高台に位置しており、下を見下ろすことはできなかった。何かがおかしいと感じたのは建物の上から黒い煙が上がり始めた時だった。はじめは、地震の影響で建物が倒れたかと思ったが、黒い煙は自分たちのいる第二避難場所に迫ってくる。「逃げろ！死ぬぞ。津波だ。」避難所よりも高台にいた教員の声でその煙の正体が津波ということを知った。大パニックになった。避難者は一斉に上へ上へと走った。後ろからは黒い波が迫ってくる。懸命に走る中「後ろを向くな。とにかく走れ。」と声が飛び交っていることを覚えている。 今思えば、避難訓練は第二避難場所が最終地点と設定されており、その先は想定には

ないものだった。山に登り波が来ていないことを確認した時、助かったと自覚した。しばらく山の上から状況を観察し津波が来ないことを確認した後、点呼を取った。パニックの中、個々の避難になったが生徒は全員いることが確認できた。

(2) 避難所生活

点呼を取り終えたころ、日は沈み始め雪が降っていた。生徒のほとんどは薄着でこのまま外で過ごすのは難しかった。教員で話し合いを行い、避難した場所のすぐそばに有料道路が通っていることがわかり、歩いて内陸（市内）の避難所に歩いて移動することが決まった。車で 20 分の距離だが、徒歩にすると 5 時間ほどかかってしまう距離だった。あたりは真っ暗になり歩いていると、トラックが 1 台立往生していた。避難状況を見た運転手は、生徒(避難者)を荷台に乗せピストン輸送をしてくれた。

避難所につくと、外では焚火がされており多くの避難者が避難してきていた。バスケットコート 1 面ほどの体育館に、2,000 名が避難している状況だ。横になるスペースはなく体育座りで一晩を過ごした。トイレは仮設トイレが 1 つしかなく、男性は建物の裏で用を足すように指示が出た。夕食は、避難者の中に魚を運搬しているトラック運転手がおおり、積み荷を譲ってくださった。

調理器具はないため、道路わきの排水溝の網で魚を焼き避難者で分け合って食べた。このような状況もあり、生徒の中には不安から取り乱してしまう子もいた。先生という立場でも、決して「大丈夫」とは言えず背中をさすことしかできなかった。とても無力な夜だったことを覚えている。2 日目の朝。自衛隊が到着し救助活動が始まった。市街地のメインストリートとは瓦礫で遮断され避難所は半孤立状態であった。

避難所では、朝食として、近くに流れ着いた袋菓子を生徒みんなで分けた。ラジオ局に協力をしてもらい、生徒の無事を保護者へ知らせるのと同時に、避難場所を放送した。全生徒が保護者に引き渡せるまで 1 週間かかった。保護者に引き渡されるまで、生徒は避難所運営を行った。各班班長を決め、班ごとの役割を務めた。ここで学んだことは、避難をしたら誰かが面倒を見てくれるわけではない。自分たちで、避難所運営をしなければならぬということだった。生徒も教員も地域の方々も一丸となって運営をしていくことの大切さを学んだ。

(3) 釜石の奇跡

釜石市は 888 名の死者、154 名の行方不明者が出た。学校にいた生徒は全員無事だった。※欠席、早退の生徒 5 名は命を落としてしまった。

この事実から、テレビなどでは「釜石の奇跡」と言われるようになった。釜石東中学校ではこの奇跡に対して疑問の声が上がった。なぜなら、釜石では 30 年以内に大きい地震が来るといわれており、確率は 75%と専門家が言っていた。そのため、小中合同の避難訓練や防災学習、地域の方との顔合わせを毎年行っており、津波の被害や避難場所もあらかじめ確認をしていたのだ。

3 月 11 日地震が収まって誰よりも先に動き始めたのは生徒たちだった。一次避難場所に避難した際、もっと上に避難したいと発言したのも生徒だ。それは、地震・津波の怖さを知っていたからこそその行動発言であった。釜石東中学校は、奇跡で助かったわけで

	はなく、事前の備え・知識があったからこそ助かったのだ。 そんな釜石では、防災学習の際3つの言葉(キーワード)を大切にしていた。 ・自分の命は自分で守る 津波てんでんこ 点でバラバラになり逃げなさい。という意味だが、これは冷たい意味ではなく、生きていれば必ず会えるからというメッセージが込められている ・助けられる人から、助ける人へ みんなを自ら救え、という意味ではない。これは自分が避難をいち早くしろと言ういみだ。避難をしている人を見ると、人は逃げなくてはと思う。その一人目になるためのキーワードだ。 ・学んだことを地域に伝える 防災意識は、地域全体が高めていく必要がある。一人が防災に詳しくても意味がない。情報を伝達することこそが、防災につながる。 この3つの言葉(キーワード)を釜石東中学校は守れたから助かったと感じている。そして奇跡に対しての最大の違和感は、888 名の方がなくなっているのに奇跡と呼んでいいのだろうか。今でも疑問を抱き生きている。今日を災害後という方が多いが、災害前と考えると、一人一人が災害に向き合い、学び備えることで被害は最小になる。地域一丸となって防災意識を高めることが大切だ。 今も、癒えることのない傷を抱えて生きている方がいる。そんな中自分だけが前向きに生きていいのだろうかと考えることもあった。きっと同じ悩みをもつ方は多いだろう。また、今後もし経験することがあれば思い出して欲しい。 復興していくためには、誰かが前を向かなければならない。一人の前進が、地域の前進になる。胸を張って前に進んで欲しい。そして自分の経験と知識をたくさんの人に話して、安心して暮らせる生活を実現して欲しい。  
開催地より	ご自身の東日本大震災時の体験談や釜石東中学校での取り組み等のお話いただき、災害に対するイメージを改めて認識できた。 本日の講演を受けて当町では、生徒以外にも自主防災組織や町民へのさらなる啓発と、学校や地域等との連携をより高めて町内の防災活動の活性化につなげていきたい。